

と大和繪復古の唱主として開拓せし國畫の大要を知らしむ(二六頁)にあると述べてゐるが、事實四六倍判三百頁に餘る本文中右に擧げた二章以外は、訥言の作品の紹介作風の解説(第三三章)訥言の修行第四・五・六章、訥言の繪畫第九章、訥言の代表作及遺品第十四章、訥言の逸話(彼の繪師としての地位及び環境(第八章)訥言の交友と生活(第十章)名古屋と訥言(第十二章)訥言と其門流)等彼の藝術に關する記述が大部分を占めてゐる。これは藝術家の傳記をものする態度として極めて當を得たものといふを得べく、筆蹟落款に關する記載(第十三章)、玻璃版七十三圖銅版四十一圖の挿入寫眞、卷末の作品目錄及年表と共に、訥言の藝術への好個の入門書であり、我等文化史精神史の立場より藝術及び藝術家を考察せんとするものに對しても裨益する所少くない。

しかもこの著者にして「畫蹟の遺存するもの頗る多く、傑作と認むべきものは成るべく多くこれを收載する筈であつたが、如何せん本書は傳記であつて畫集にあらず、よつて當然登載すべき作品と雖も、僅かに其十の一を採録したに過ぎぬ。しかもなるべく本文中に關係あるものを採つたから、これに逸せる珠玉の作は尙相當に多いこと、信ずる(凡例)の言ある事は甚だ意外に感ずる所であつて、畫家の人及藝術を叙する場合、作品若くはその複製を能ふ限り多數示す事の必要なるは餘りにも明白な所であるにも拘らず、經濟上其他の事情によるならばやむを得ぬ事乍ら、傳記であるがためにとの理由を以てその收載を躊躇したとは、著者の上述の本書記述の態度と矛盾を來しはせぬであらうか。まして私事

不傳を主張した程の訥言の場合、良心的なる解説を有する畫集こそ最も故人の意圖に忠實なる傳記なのではあるまいかとさへ思はれるに於ては尙更である。

流石に著者自身が大和繪の専門家であるだけに訥言の製作態度に關する記述は著者發見の訥言畫稿よりの挿入寫眞と相俟つて特に興味深く且教へられる所が多いと思はれるが、更に彼の作風のより細部的特徴についてより具體的専門的な解説を得る事が出来れば、藝術學界に益する所一層大なるものがあるであらう。殊に彼の古畫模寫に於ける態度手法を模本原本對照しつゝ、充分解明し、次でこの模寫の場合と創作の場合との技法上の關係を今少し細部の具體的に説明してこそ、當時の尙古的復古的精神の具現者の一人としての訥言の、大和繪復古の大業の性格及び意義が眞に明瞭にされるのではあるまいか。かゝる考察をなすための素養と資格を具有せる著者に期待する所切なるものがある。四六倍判、三〇二頁、昭和十三年六月、著者自刊、名古屋市中區流川町五四、曾保津之舎發行)(島 道雄)

大阪府下に於ける後村上天皇の御聖蹟

—大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第九輯—

木村 武 夫 著

序文に於いて著者が言つてゐるやうに「吉野時代五十有七年の抗争は、すでに先人の述べた如く、まことに攝河泉三國の土地の

奪取戦であつた。随つて此の三國の地の大部をその中に有し、吉野時代の著名なる史蹟を豊富に藏する大阪府下に於いては、それらの史蹟を保存し、顕彰すると共に吉野時代史の研究に嚮はんとする熱意が熾んである。

大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告は曩に第六輯「天野山金剛寺古記」を公刊して、學界に寄與するところ極めて大なるものがあつたが、その後相繼いで金剛寺法藏中の聖教類より、後村上天皇宸翰御與書を始め、當時學頭職であつた法印禪惠の與書等の發見が行はれ、幾多未知の事實を學徒に提供するものがあり、今や一應是等の貴重な史料を蒐集整理して、新たに書き易へられた歴史書の出現することが、切に要望されてゐることに鑑み、茲に第九輯を以て、大阪府下に於ける後村上天皇の御聖蹟」を調査して天皇の御聖徳を偲び奉ることのために當て、著者木村武夫氏苦心の勞作を以て世に問ふに到つたのである。

分つて、第一「後醍醐天皇の御代」、第二「住吉の行宮(其の一)」第三「天野の行宮」、第四「觀心寺の行宮」、第五「住吉の行宮(其の二)」の五章とする。天皇御一代の間に於ける行宮の御遷徙に順つたものである。而して著者は此の各章下に於いて、嚴に年月の編次を逐ひ、其の間に生起する萬端の事象を漏れ無く詳記して、その各々に就き細密な考證を遂げてゐる。例へば行宮に於ける御座所の位置に關しては、博く資料を近世の記録、地誌、名所圖繪の類にまで求めて、後人の記憶と關心に顧慮を拂ひつゝ、其の正しき位置の決定に専念し、特に住吉の行宮に於いては、現在遺蹟と

して傳へる「正印殿」なるものが實は近世の建造にかゝるものたることを指摘して、その説を否定すると共に、更にまた關太曆に見ゆる「住江殿」を以て直ちに神主津守國夏の居館そのものと讀解せる大日本史料の誤謬をも訂正して、住江殿は神主館とは別離して新たに天皇の御在所として修造せられたものであることを主張してゐる。

斯様な慎重な研究と相俟つて、圖版にも、前に述べた後村上天皇宸翰御與書の現在既知のもの全部の寫眞を收載したのを始めとして、禪惠與書、久米田寺長老明智上人自筆經疏與書、吉野運川寺靈祥自筆大般若經與書等の價值高き史料を豊かに挿入して、讀者の理解を早からしめ、報告書としての完璧を期してゐることが窺はれる。

乍併ら本書の眞價はかゝる詳悉的な事實の叙記と穿鑿の點に依存するのではない。それは一に著者が是等個々の史料や史實を如何に秩序立て組織的に組み上げるべく努力したかに掛つてゐるのである。此の意味に於いて觀るとき第一章は、後村上天皇の時代に先行する後醍醐天皇の御代を記す裡に、正中元年の變以來、打續く世の亂離によつて具さに辛苦を嘗めさせ給へる後村上天皇の御幼時を點描し奉つて次章への前記たらしめると同時に、また一方後醍醐天皇の討幕の御計畫に參與しまゐらせられた觀禪僧正の法脈が、金剛寺、觀心寺、久米田寺、松尾寺等、河泉の眞言諸寺院をして勤皇に趨かしめた所以である事を説き、更に文觀の高弟たる禪惠と親交を有したことによつて住吉神社の神主津守氏が夙くより

忠勤を抽んで、惹いては住吉社領堺莊の住民が南山に誠忠を捧ぐるに到る深き因由を述べて次下の本論への伏線たらしめてゐることに著目することにより高く評價さるべきものと考へられるのである。かくして吉野朝廷成立の後には、「その前衛として、財源地として、そして又西國の官軍との聯絡を保つ交通の要地として」大阪地方に新たなる意義が發生したとなす著者の一貫した主張の下に一々の零細な事象が悉く意味づけられ、全體への連繫に於いて整然と配合されてゐるのを見る事が出来る。叙述の主要な對象が攝河泉の境に置かれてゐながら、而も京師はもとより遠く東國より西海に亙る兩軍勢威の興亡と戰況の推移、離合極まり無き武家方諸將の向背の事情が絶えず語られてゐるのも、決して冗漫な粉飾として加へられたのではなく、本書が著者自身によつて把握された吉野時代史の體系の發表である以上、當然缺くことを許されぬものとして導かれて來てゐるのである。謂はゞ單なる報告書としてよりも、寧ろ單行本として世に贈られることの望ましい、好著と稱して謬らないであらう。(本文一三三頁、圖版二五葉)〔稲葉慶信〕

『敦煌石室寫經題記』與『敦煌雜錄』

許國霖編

西紀一八八九年明治二十二年 Power 大佐が偶然支那土耳其斯坦の一地點なる Kutchu に於て婆羅門文字を以て書かれた古文書を發見して以て、中央亞細亞地方に多數の史料の潛藏せられ居るなら

むこと東西の東洋學者の意識する所となりしが、次で一八九三年明治二十六年 Khoutan 地方にて Kharostu 文字を以て書かれた古文書の出土するあり、恰も時を同じくして Kashgar 駐劄の露西亞總督 Petrovski 將軍が多量の素焼の陶器と古文書とを發見するあり、該地方一帯が東洋史研究上の未知の資料の寶庫ならむこと愈々學界に注意せられ、學術的探險隊を組織して該地方に派する機運東西に起る。乃ち露西亞の Klemenz 英吉利の Sir Aurel Stein、獨逸の Grünwedel 及び Le Coq、日本の大谷光瑞、橘瑞超の諸氏、佛國の Paul Pelliot の如き人々何れも此の地の學術的調査・史料調査を行ふこととなつた。Pelliot 博士が甘肅省敦煌縣の千佛洞に於て得る所の約六千點の古文書は佛國々立圖書館に、Stein 博士の得たる所の約六千點のものは大英博物館に、それ〴〵世界の寶として度藏せられて居る事は周知の通である。此の古文書の持ち去られたる一九〇七・一九〇八年明治四十一年頃には支那は清國政府にして、斯くの如き貴重資料の海外に出でたるに驚き、一面に於て敦煌の地方官の怠慢を處罰し、一面に於て北京より官吏を現地に派遣して殘部を悉く北京に釐致した。今日國立北京圖書館に藏せらるる敦煌發見資料はそれである。

此等の所謂敦煌發見資料は、私が佛國にあるものを悉く調査したる經驗に徴すれば、北魏の道武帝時代より北宋の太宗時代に亙る約六百年間に或は敦煌地方にて書寫・撰述せられ、或は中原の地より敦煌地方に送られたるものにして、墨汁・毛筆を以て紙面に手寫(若干字幅あり)したる經典史籍・佛教經文・道教經文・官